
魔王の休日

sora

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の休日

【Nコード】

N6984W

【作者名】

s o r a

【あらすじ】

俺は魔界に生を受けて5000年。休暇と言うものを得た事が無い。お前たちは「休暇を頂く」などと言っては自分の居城に帰するであろう。何故俺よりお前達の方が待遇が良いのだ？俺は納得出来ん。今まで休みが無かった分、纏めて休みを貰う事にする。そう宣言して魔王は休暇旅行を満喫する為人間界に……

プロローグ

「……1500年後にまた会おう」

それが最後の言葉だった。

赤錆色の空には巨大な蒼い月が浮かび、時おり鉛色の雲がそれを覆い隠す。錆色の大地には広大な樹海が広がり、空の色を映した湖面は静かに波打っている。遙か前方に視える鋭利な山々は常に黒々とした煙を噴き上げ、時に灼熱の火柱を幾筋も空高く噴き上げる。

そんな景色を眺望する1人の男がいた。

黒竜の革をあしらったズボン、その鱗で出来た靴、銀狼の体毛で編んだシャツを身に付けた10代後半に見えるその男は、この魔界を統べる唯一無二の存在。天上天下唯我独尊を貫く魔王フィニスである。

輝く銀髪と研ぎ澄まされた黒眼、細く引き締った身体は常に紅のオーラを発し内なる魔力の膨大さを物語っている。その背には漆黒の翼を持ち、頭上に木の枝の様な2本の角が伸びている。

魔王が窓辺でたたずむ室内、そこには黒曜石で出来た重厚なテーブルを囲むように数人の男女が豪華な椅子に腰を降ろしている。

皆、鎮痛の面持ちで魔王フィニスに視線を向けている。魔王の言葉を待っていたのだ。

魔王はおもむろに右手を挙げると窓の外、上空に浮かぶ蒼い月を指差した。

話を少し戻そう。

ここは魔界の王城アエテルネス。その尖塔最上階の一室である。

魔王の命により魔界の重臣達が重大な会議と称し集められていた。その重大な会議とは。――『魔王の休日について』である。

魔王曰く。

俺は魔界に生を受けて5000年。休暇と言うものを得た事が無い。お前たちは「休暇を頂く」などと言っては自分の居城に帰するであろう。何故俺よりお前達の方が待遇が良いのだ？俺は納得出来ん。今まで休みが無かった分、纏めて休みを貰う事にする。

魔王の言葉に皆は啞然としている、魔王の言う意味を理解していないのだ。

今更休暇などと言うが、この魔王は毎日ふらふら遊んでいるだけなのだ。

謁見を求めても気分が乗らなければ一切相手にせず追い返す。魔獣の群れが暴れ村を襲おうとも、報告に来た者に「適当に処理しておけ」と言い渡すだけで自分は一切動こうとしない。

好きな時に寝て、好きな時に起きて、毎日好きなものを食して、どこか出かけるにしても、誰にも行き先も告げず数日城を空けることもしばしば。

帰ってきたと思えば、体中にキスマークなど付けている。

そんな魔王が今更休暇？毎日が休暇の様なものではないか？

皆がそう思っているのだ。

もちろん、あくまで思っているだけだ。

口に出すものなど誰一人として居ない。

魔王はそう宣言した後なにやらブツブツ1人で呟きだした。

「1年……休……12……と……5……だか……12……5……
……それ……3……4……5で、……だから……えーいややこしいわっ
！今、今日この時より1500年を俺の休日とする」

休みを1500年……あまりにも無謀な要求だが、誰1人も逆らう者は居ない。逆らえばその場で消し炭と化すのは目に見えているからだ。

ここに集まる重臣達とて決して弱い訳ではない。上位魔人の中でも特に戦闘力に優れた者ばかり。魔界は力が全ての世界なのだ。しかしそんな重臣達が束になっても魔王には適わないだろう。魔王フィニスはそれ程絶大な力でもってこの魔界を統べているのだ。

更に言えば、どうせ今の何ら変わらないであろう。と解釈していたのだ。

「……………」

室内は、しばらく沈黙が続いていた。

そんな一同を見て、魔王は会議の終わりを宣言する。

「質問が無い様だから、これで会議は終わる」

皆が呆れる中、魔王は意気揚々と部屋の出口に向かい、ひとりこちた。

「1500年の旅かぁ、さて何処にいくかな……」

小声ながらも口調、声音までもが完全に少年のそれに代わっていた。

その怜悯な顔も、もはや夢心地の様な笑みを浮かべている。

しかしそんな些細な事など誰も気にしていない。

その発言内容に皆が驚愕の表情を示していたのだ。

「ま、魔王様、し、少々お待ち下さい」

「フィニス様、お、お待ちを」

「へ、陛下……」

部屋を出て行くこうとする魔王を皆が慌てて引き止める。

一瞬で部屋の空気が張り詰めた。魔王の身体を纏う紅のオーラが真紅の炎のように揺らめき出した。その瞳は氷の刃の如く凍っている。

「……………俺は、「今この時より休みにする」と言わなかったか？」

声までもが呪詛の様な響きに変わっている。

皆が慌てふためき、引き止めたことを誤魔化そうとする。今すぐ魔王の怒りを治めなければ城ごと瓦礫と化す恐れがあるからだ。

「い、いえ、その、よ、良い旅をと……………」

「お、お気をつけて。と……………」

その言葉に騙された魔王は、怒りをスウーーーーっと治めていった。

顔に笑みが浮かび、身体を纏うオーラがさざ波のように凪いでいく。

「うむ、そうか。皆には苦勞をかけるが、後はよろしく頼む。俺も5000年働き詰めで、少し疲れたからな。ゆっくり静養してくるぞ」

魔王は、突然上機嫌で語りだした。

皆は別に引き止めるつもりなど無いのだ。そんな事をすれば殺されかねない。

ただ1500年もの旅、さすがに何処に向かうのか気になり声を掛けてしまったのだ。

「その、静養には温泉などよろしいかと思われませんが、どのような所をお考えなのでしょう？」

その言葉を聞いた魔王は、静かに窓に歩み寄ると外の景色を眺め出した。

しばらく思案してい様だが、魔王はおもむろに右手を挙げると窓の外、上空に浮かぶ蒼い月を指差した。

「俺の行く先はあそこだ」

一同は固まってしまう。

魔王が指差す先は巨大な蒼い月だった。

魔界から見える蒼い月、それは人間界。逆に人間界から見える赤い月こそ魔界である。

最後に一言残し魔王は今度こそ意気揚々と部屋をあとにした。
「……1500年後にまた会おう」

後に残された者達は困り果てるものの、今更どうしようも無い事である。今後の対策を自らで考えねば成らなかった。

皆が思案する中、上座に一番近い位置に座る男が言を發した。

「では、フィニス様の休暇の折、代わってこの魔王城、しいては魔界を統治する者が必要となるが、誰か適任者は居ないか？」

もちろんこの男は自分が適任者だと思っている。

この男、上位魔人の中でも最上位に位置し、その力も魔界で3本の指に入ると云われているのだ。もちろん魔王フィニスを除いてではあるが……

旅の支度

魔王フィニスは自室に戻ると、旅について思索していた。

旅に出ると言ってはみたものの、なにをどうすれば良いのか分からない。今まで旅などした事がないのだ。

とりあえずメイドを呼び、旅について尋ねる事にした。

リリンッ！ リリンッ！

綺麗な鈴の音が室内に響き渡る。

魔王の趣味で、メイドを呼ぶ為だけに備え付けられた呼び鈴の音である。

呼び鈴が鳴ると3秒以内に駆けつけないといけない。そんなルールも魔王は定めていた。

きつちり3秒で、ゴシツクロリータ調のメイド服を着た、真っ直ぐな黒髪を腰まで伸ばした容姿端麗な美少女が隣室より駆けつけた。ケーキでも食べていたのか、その口には白いものがこびり付いている。

「陛下、お呼びでしょうか？」

「チッ！」

「……」（チッ！って…… またわたしに刑罰をお与える気なのだわ）

一瞬の静寂。重苦しい空気が室内をよぎった。

そんな空気を払うようにフィニスを声を発した。

「俺は旅に出ることにした。そこで旅というのはどうすれば良いのか知りたい」

「は、旅でございますか？」

「そうだ、旅だ、2度言わすな」

「も、申し訳ございません……」

恭しく頭を垂れるメイド。しかしその顔はなんとも言えない表情を浮かべている。

突然旅など言い出す魔王に対し、いったい何を考えているの？と訝しんでいるのだ。しかし答えないわけにはいかず、知っている事を口にした。

……………

そのメイドが言うには旅と言うのは何も難しく考える必要は無く、必要な荷物を持ち好きな所に出かける。それだけで良いという。ただし日帰りは旅とは言わないとも付け加えた。

「なるほど……　　ってか、そんな事は知ってるわっ！　俺が聞きたいののは、何を持ちどうやって目的地に行けば良いか。という事だ！」

メイドはそれにも完結に答えた。

目的地により必要な荷物は変わるが、もっていなければ現地で調達すればいい。逆に言えば、お金さえあれば何も要らないとも言った。まあ目に見える範囲で必要と思うものを適当に持てば良いのだということだ。そして目的地には歩いて良いし、飛んでも良い。好きにすれば良いのだと、もはや投げやりの口調であった……

実はメイドも旅などした事が無い。した事がないから適当に答えるしかなかった。しいて言えば馬鹿な質問に真面目に答える気がないのだ……

フィニスはその言葉に納得したのか、鞆を用意させると、適当にあれこれ詰め込みだした。

着替え、枕、洗面具、拳句の果てに応接セット、天蓋付きのベッドまで鞆に詰め込んでいる。それを見つめるメイドの額には冷や汗が浮かんでいた。

「……」

ここで鞆と称している物は、実は魔界でも珍獣種とされる黒穴兎である。

黒穴兎はその非力さゆえ、一生の内に一度しか巣穴から出ないと言われている。

その一度に、一生分の食料を蓄える為、腹部に異次元空間に繋がる袋を持っているのだ。

魔界最弱と言われる兎が、力が全ての魔界で生き残る、進化の果ての姿なのかも知れない。

しかしその見た目は人間界の兎となんら変わるところは無い。

フィニスは結局、室内にある全ての物を鞆に詰め込んでしまった。

「……」

準備が終わり、いざ出かけ様と思ったが、よく考えてみれば行き方すら分からなかった。メイドに人間界への行き方を尋ねても知らないと言う。1500年後に会おうと言った手前今更皆の前に顔を出し聞くわけにもいかない。困り果てていると、メイドが「『使い魔』をお連れになったら如何ですか？」と提案してきた。

『使い魔』とは絶対的な主従関係で成り立ち、多様な雑用をこなす魔物などのことを差す。その雑用の中には伝言、届け物、偵察、情報収集なども含まれ、人間界へ行く方法も知っているのでは無いかということだった。

妙案！ と思ったフィニス。

しかし彼は『使い魔』を持っていなかった……

言うなれば城に住む全ての者が魔王にとって『使い魔』同然であったからだ。

瞑目し思考するフィニス。

「……」

その瞳が開くとメイドと視線がぶつかり、フィニスの顔に冷笑が浮かぶ。

メイドの脳裏に嫌な予感がよぎった。

退室を願い出ようとしたが時すでに遅し。

「よし、お前が俺の『使い魔』になれ！」

メイドの顔には冷や汗が浮かび、その頬は痙攣している。

「あ、あの……『使い魔』には普通、黒猫とか、その鴉とか……」

「今から探すのは面倒だ。お前が黒猫か鴉になれば良い。で、どっちにする？ 特別に選ぶ権利をお前に与える。なんなら両方でもいいぞ？」

（そんな権利、いらないわよっ！）

心の中で叫ぶしか出来なかった。

フィニスの口は笑っているが目が完全に座っている。

もはや拒否を選択する余地は無いようだ。さらに言い逃れは極刑を意味するだろう。

魔王が与える極刑、それは公言出来る物ではない……

半分涙目のメイドは諦めたように呟いた。

「わ、わかりました……では、く、黒猫に……」

（下級魔人から奴隷^{メイド}になり、拳句の果てに使い魔ですか……）
自分を生んだ親を恨みたい気分になっていた。

「よし、では契約だ」

言下に『使い魔』としての主従関係を結ぶ契約が行われ、メイドは背に小さな翼を持つ黒猫に姿を変えた。

「ふ、フィニス様……？ ち、力が、力が溢れてきます……」

「ああ、仮にも俺の『使い魔』だ、非力なままでは使い物にならないだろう？ 俺の力の一部を与える事にした。ちなみに元の姿にも自由に帰れるぞ」

「え？ そうなのですか？ 一生この姿だと思ってました……」

「仮にもこの俺が契約するんだぞ？ そんな不便な真似をするか……」

…元の姿を思い浮かべて、戻れと念じてみる」

メイドは言われたとおり、元のメイドの姿を思い浮かべ「もどつて」と念じてみた。するとポン！と言う軽快な音と共に煙が沸き立ち、瞬時に元のメイドへと姿を変えた。

「す、素晴らしいですわ……」

さっきまで涙目だったメイドは感動に身を震わせている。

「そ、そうか……」

「ありがとうございます。わたくしは身も心も一生フィニス様にお使い致しますわ」

「あ、ああ、そ、そう言う、け、契約だからな……」

何故かフィニスがどもり出した。顔も幾分引き攣って見える。

フィニスは感謝される事が、事のほか嫌いだったのだ。

フィニスはこの嫌な展開を打破するべく出立を口にした。

「よし、では人間界に休暇を満喫しに行くぞ」

「はい」

「……」

「……」

「どうした？ 道案内しろ」

「わたくしは、存じませんが……？」

「……」

今頃になって『使い魔』を連れて行く所以を思い出す2人だった。

旅の支度（後書き）

とうとう最後までメイドの名前が思いつきませんでした……

メイドの名前

「城内の誰でもいい、人間界への行き方を聞いて来い」
「畏まりました」

慌てて走り去るメイド。

フィニスはその後姿を眺める時を『至福の時』と呼ぶ。
短すぎるエプロンドレスの裾が跳ね上がり、露になるガーターを
付けた太腿と白いショール……（やはり腿は後ろがいいな♪）

程なく、その手には大きな地図を抱えたメイドが戻ってきた。
地図は魔界の全土を記した物だった。

メイドは地図を床に広げると、「ここです！」と自慢げに指を差す。

そこにははつきりと『魔界正門』と書かれていた。

ドヤ顔のメイドはご褒美を下さい。と言わんばかりに頭を下げて
いる。

「む、それで……？」

「は？ ですから、ここから人間界に行けます……よ……？」

メイドの声は語尾が擦れて、その手はしっかりとドレスの裾を握り
締めている。

室内の温度が下がり魔王のオーラが炎と化す。

「誰が門の位置を聞いたのだ？ ……………俺は門までの道のりを聞
いてるんだあつ！」

「ひえええ！ も、申し訳ありません」

目に涙を湛え、何度も頭を下げるメイドに、フィニスは審判を下
した。

「……………極刑に処す……………」

いっぽう、メイドのモモは、黒猫となり小さな翼を慌しくバタつかせている。

「ま、待つてくださいよー」

フィニスは翼をはためかせる事無く風に乗っているだけなのだが、飛翔能力が大きく劣るモモは付いて行くもやっとなのである。

「ん？ 魔人化するなら抱いてやるぞ？」

そう言うフィニスの手は、なにかを揉みしだくかの様に動いていた。それを見たモモは寒気を覚え、「え、遠慮します……」と拒絶の意を示した。

「チイツ！」

「……」

王城から見える赤錆色の空に、2つの人影が遠ざかって行く。その影は次第に小さくなり、何時しか夕闇の中に消えていた。

魔王城内では、魔王が旅立った事を、今更ながらに知る事となる。城に仕える者達から一様に安堵の溜め息が零れた。

手を取って喜び合う姿があちこちで見受けられたが、一時喜び合うと、皆一様に儚げな表情を浮かべている。

「でも、ちよつと寂しいわね……」

城内ではそんな声が静かに囁かれていた。

しかし密かにほくそえむ者が居る事を誰も知らない。

メイドの名前（後書き）

お気に入り登録して下さった方がいます。
この場でお礼を。

もちろん読んでくださってる方にも。
ありがとうございます。

いざ人間界に

数時間後、魔王とメイドの2人は地図に『魔界正門』と記された場所に辿りついた。

結局モモは強制的に魔人化させられ魔王にお姫様抱っこされる形で此処まで飛んで来たのだ。

「お前の速度に合わせていたら何日掛かるか分からんぞ」

フィニスの苛立った声がモモに発せられる

「だ、だって初めて飛ぶ訳ですし、翼もこんなに小さいですし……ブツブツ……」

モモは半泣き状態で苦言を申し立てている。

「だから魔人化しろと言っている」

「じ、じゃあその嫌らしい手をなんとかして下さいっ!」

フィニスの手の動きは癖になっているようだ。

「この魔王に向かって、嫌らしいだと……」

遙か上空に鉛色の雲が集まり、稲光が生じ雷鳴が響きはじめている。

魔王の怒りが雷雲を呼んだのだ。

「ひ、卑怯ですう。脅して乙女の身体を弄ぼうと言っているのですか?」

「なにが乙女だ、お前の身体は散々汚されているであろっ」

「け、汚されてっ……それが女性に言う言葉ですか? そ、そ

もそも、け、汚したのは何処の誰ですかあっ!」

「ん? さ、さあな……」

「……あうあう……」

そんなこんなで結局魔人化させられた訳である。

たしかに、あのままの速度で飛んでいたら数日の行程に成っていたらろう。

モモもこの距離を自力で飛ぶのはちょっと無理だと判断した結果かもしれない。

『魔界正門』。

いかにも、らしい呼び名だが、そこはただの小さな洞窟だった。上空から見下ろしていた感じでは、山の麓から曲がりくねった道が山の中腹まで続き、その山道の行き着く先が洞窟の入り口になっていた。

その洞窟は入り口少し奥に、なにやら黒い渦のような空間が生じているだけで、門と呼べる代物は何処にも見当たらず、一見普通の洞窟である。

入り口には門番と呼ばれる完全武装の魔人が2人立っていた。

魔王の接近に門番は警戒した様子で槍を構えたが、その姿がはっきり見えたとたんに、敬礼の姿勢に変わっている。

門番2人は兜で頭は見えないが、うなじから灰色の髪を覗かせている。おそらく中位魔人だろうと推測できる。

ここで魔人の髪について補足を入れておこう。

魔人の髪色は、生まれた時の魔力量によりその色が決まると言われている。

魔力が限りなく少ない者は漆黒、逆に多い者は銀色で生まれる。

そしてその髪色により下位、中位、上位魔人と区別される。

モモのような黒髪は魔力が少なく下位魔人と呼ばれ、ここの門番のような灰色の髪は中位魔人と呼ばれる。もちろん後天的に魔力が増えた場合でもそれは変わらない。

良い例がモモである。

モモは下位魔人として生まれたわけだが、魔王との契約で今や膨大な魔力を有している。実力的にはギリギリ上位魔人に位置するだろうが下位魔人なのである。

結局のところ、上位下位などと区別しているものの、あくまでも
実力主義の世界である。どちらが上か下かはその実力のみで判断さ
れる。

洞窟入り口に降り立った魔王は、威厳のある声で門番に話しかけ
た。

「ご苦労。異常は無いか？」

「はっ！ 異常ありません」

門番2人はかなり緊張している様だ。微妙に手が震えている。

魔王はそんな門番に微笑を浮かべ更に言葉を続けた。

「うむ、では引き続き職務をまっとうする様に」

「はっ！」

恭しく一礼をしているが、その表情には、なぜ魔王様がこんなと
ことに？ といった不審の色がありありと覗えた。

魔王はそんな表情を知ってか知らずか、気にする様子はない。

門番達も、いくら不審に思おうがそれを口に出したりはしないだ
ろう。

「俺はこれから人間界に行く。直ちに結界を解いて欲しい」

今の魔王の言葉に驚いたのはモモだった。

（欲しい？ フィニス様が、お願い？ っていうか、声音も変わっ
てない？）

魔王は早く人間界に行きたくてしょうがなかった……………

門番は直ちに結界を解くと、転移先を聞いてきた。座標を指定す
る事で人間界の好きな場所に転移出来るのだ。

しかし魔王は、人間界について全く下調べをしておらず、何処に
何があるのかも全く知らない状態である。もちろんモモ知るはず
が無かった。

「何処でも良い。適当に飛ばしてくれ」

魔王は声が上ずり、さらに早口になっている。まるで子供がお菓子を欲しがっている様だ。

しかし、モモが反対意見を述べた。

「フィニス様、出来るだけ人が少ない所が良いかと思っています」

「ん、なぜだ？」

フィニスの目が一瞬光る。

それに気付かずモモは、落着いた表情で淡々と意見を述べる。

「フィニスは人間界に静養しに行くわけですから、人間界で問題を起こせば多少なりと面倒なことに成ります。ですからあまり目立たぬ方がよろしいかと…… その為にも人間が少ない方が良いでしょう」

「なるほど…… うむ分かった。——しかしお前生意気だぞ…… 後で尻叩きの刑な」

「ええええつ そんなぁ……」

そんな2人のやり取りを冷や汗を流しながらも、半分呆れ顔で眺める門番。

結局モモの意見を採用し、出来るだけ人間が少ない地方で、上空かなり高い位置に飛ばすよう門番に指示を出した。

かくして2人は門を潜り人間界へと旅立った。

初めての人間界（前書き）

メイド、モモ視点

（テスト投稿です。不評でしたら書き直します）

初めての人間界

人間界。

転移した先は、どこかの大陸の上空でしょうか？

四方見渡しても青い空、空、空、空。

視線を下に向けるとそこは真っ白な世界。

「……」

「……ここはどこだ？」

「さあ……」

「眼下に見えるあの白いのはなんだ？」

「……ゆ、雪でしょうか？」

「ほう……あれが雪と言うものか」

「わ、わたくしも見るのは初めてで……」

フィニス様のオーラが禍々しく揺らめいているのは気のせいでしょうか？

「馬鹿ものおお！ あれは雲海だあ、その身体で確かめてこおおおおおいいいいいい！」

「あれええええええええええ……」

ヒュウウウウウウウウウウウウウウウウウー

お姫様抱っこされていた私は、翼のないその身体をフィニス様に投げ捨てられました。

雪だと思った白い物は雲で、わたくしの身体は雲を付きぬけ地上へ真っ逆さま。

しかし、わたくしは猫化できるのですよ。うふふ

「猫化♪」ポン！

小さな黒い翼をバフツツと広げて、どんなもんよ♪

「チィ！」

あれ、いま「チィ！」って聞こえた気が？

とっ、フィニス様が直ぐ後ろにいました。

「チイ！ってなんですか？ わたくしを殺す気ですかあ？」

「ふんっ、そんなことはどうでも良い」

どうでも良いって……グスン。

眼下を見ると樹海と湖が見えますが街や村は見えません。でも街道らしき緩やかに曲がる細い線が見えます。

「フィニス様、あの街道らしき所に下りましょうか？」

フィニス様はわたくしの提案に「ふんっ」と鼻を鳴らして一人先々下りてしまいました。

どうやらわたくしが無事だったことを本当に悔しがっているようです……

てゆうか拗ねてるんですね。うふっ

っとフィニス様を追いかけないと。

「まっってくださいーい」

ようやく無事人間界の降り立ったのです。でも、この姿は問題あり！ですね。

「フィニス様、わたくし達のこの姿は問題があると思われます。フィニス様は翼と角を消して、わたくしは魔人化した方がいいでしょうね？」

ちなみにわたくしは魔族でも下位魔人です…… 翼と角なんてありません。グスン。

てゆうか、翼と角があるのは上位魔人の中でも、極わずかなお方のみです。いわゆる超エリートって方達だけなんですね。

フィニス様はご機嫌です。人間界に降り立ったのだから当然かも知れませんが。機嫌が悪くなるもの一瞬なら、その逆も一瞬なのですね。

フィニス様は角は消して、翼はマントに変えた様です。……つくづく器用な方なのです。

服装はいつも定番の、黒竜素材の靴とズボン、銀狼素材のシャツ。わたくしは魔人化して、メイド服です。

これらの格好が人間界でどうなのかはわかりません……

「さて、どちらに向かいましょうか？」

「ん……」

「フィニス様？」

「よし、向こうだ」

フィニス様はそう言っただけとある方向を指差し歩き出したのです。もちろんわたくしも、すぐ後に付いて行きますよ。

「フィニス様、どうして此方に？」

「ああ、人の気配がするからだ」

「そうですか」

なるほど、この辺も上位魔人と下位魔人の違いかもしれません。

「つてか、お前にも分かるだろう。一部とはいえ、おれの力を与えているんだぞ？」

そう言われて、わたくしも気配なるものを探ってみました。

……確かに人の気配を感じます。いやあ、ほんとにすごいです。

わたくしは街道を鼻歌など歌いながら歩いています。

だって、すごく気持ちがいいです」

「でも、魔界と全然違うんですね。空気は美味しいし、綺麗な花が咲いていますし、森から聞こえてくる鳴き声すら可愛く聞こえます」「うむ、そうだな。……人間を皆殺しにしてこっちに遷都するか？」

「ぶ、物騒な事言わないで下さい」

「はははっ、冗談だ」

「フィニス様がその気になれば、瞬時に可能なのですから、」冗談に聞こえませんか！」

「いや、それは俺でも無理だぞ。そうだな…… 三日は掛かる」
「……………」

そんな楽しい？ 恐ろしい？ 会話をしながら歩く事、数時間。
村らしきものが見えてまいりました。

「村が見えてきましたね」

「うむ、結構な数の人間がいるようだな」

そして歩く事数分。村の入り口です。
なにやら大勢集まって何かをしているようです。

「やけに騒がしいですが、なんででしょうか？」

「そういえば、人間というのはお祭りなるものをするらしい」

「あ、それわたくしも書物で読んだ事がありますよ。皆で集まって何かをお祝いするのではたっけ？ とにかく楽しいものらしいですね」

「うむ、そうかもしれん」

でも、さらに近づいて行くと、…… 楽しそうには見えません。

「楽しそうじゃありませんね？」

「そうか？ 二手に分かれてる様だが、片方は楽しそうだぞ？」

まあ、そう見えなくてもいいのですが……

更にみていると、どうやら祭りではなさそうです。

「あれは、山賊とか盗賊とかいう者達ですね」

「ふむ、あれがそうか」

「どうしますか？ 村を蹂躪するようですか？」

などと会話しながら近づいて行くと、向こうも此方に気が付いたようです。

「なんだ、てめーら？」

ピクッ！

「おう？ やけに凄艶な姉ちゃんだなあ」

ピクッピクッ！

「フィニス様…… ピクピク聞こえますよ？ 問題を起こすと面倒ですからね……」

「ん、ああそうだったな……」

「なにをくつちゃべってやがんだ？ てか、マジでいい女だぜえ。お頭あー すんげえいい女がいますぜえ」

あらあら、みんな来ちゃいました。

数十人はいるみたいです。皆さん刃物をお持ちのようです。

「おお、なんだこの姉ちゃんの服はよお。足出しすぎだろお……」

「いやあ、もう少し出して欲しいかもだぜえ」

「ちげえねえ。わっはっはっはっはっ！」

「フィニス様、なんだかすごい気分が悪いんですが」

へらへら笑いながらわたくし達に近づいてきます。どうやら、わたくしが目当てっぽいです。「フィニス様……」

わたくしは、フィニス様の後ろに隠れちゃいました。フィニス様を押し出すように……

「おい、なんで俺を押す？」

「いえ、とくに意味は……」

「なんだ兄ちゃん？ そりゃあお前の女かあ？」
ピクッ

「駄目ですよ。穏やかに穏やかに、です。オーラも抑えて下さいね
わたくしはフィニス様に小声で呟きました。

フィニス様も必死で我慢してくれています、よね？

こんな我慢強いフィニス様を見るのは初めての事ですな。

「なんとか言ったらどうなんでえ！」

「……これは俺の女だ。それ以上見たら殺すぞ」

「ち、挑発してどうするんですかぁ……」

「ん？ 警告してやったただけだが？」

ああもう駄目かもしれせん……

初めての村で（前書き）

魔王フィニス視点（テスト投稿です。不評でしたら書き直します）

初めての村で

脆弱な虫けらどもが、こともあるうちに、この俺様に、近寄る。視線を向ける。言葉を吐く。

確かに俺様は温厚だ。誰がなんと言おうと温厚なのだ。だがそれも限界に達していた。

モモが俺を抑えなければ、この辺り一面焦土と化していただろう。

「おい、兄ちゃん。なんだって？ もっかい言ってみな」

虫けらがこの俺様に聞き返すだと…… 兄ちゃんだと？

ああ、モモが何か言っている。もうそれも耳に入らない。

俺様の脳裏にあるのは、この虫けらどもを跡形も無く消し去りたいという欲望だけだ。

俺様は右腕を真上に持ち上げた。しなやかに軽やかに流れるように。それが俺様美学！。

遙か上空には、たちどころに雷雲が形成されてゆく。陽の光は雷雲に遮られ辺り一体を突如として薄暗く染めてゆく。

声を発する必要は無いが、俺様はわざと魔法を誇示するように口ずさむ。

これも俺様美学！

「『定点直撃型剛爆雷撃襲槍』かける…… 10」

モモの絶叫が聞こえた気がしたが、無視する。今の俺様を止めることは神として不可能。

薄暗い空が一瞬目も眩む光に包まれ、直後けたたましい雷鳴が轟くと10本の雷の槍が山賊どもの頭上を襲う。

激しい爆裂音と衝撃音が辺りにこだまする。

地鳴りを伴い辺り一帯が激しい揺れに襲われる。

凄まじい土煙が全ての視界を遮る。

もちろん俺様の周囲には超強力な結界を張った。俺様には必要ないが、モモと黒穴兎が灰燼と化すからだ。

数分後、ようやく土煙が治まると、雷の槍いかすちやりが襲った半径数メートルが隕石の落下地点の様に大きく深く穿かれていた。まだ少し煙が燻っているが、そこに居た山賊どもは肉片1つ残らず灰燼と化していた。

もちろん、山賊以外の村人達は無事である。……たぶん。

皆腰を抜かし地べたに這いつくばっているが、それは俺様の前では当然のことだ。

俺様は無駄な殺生はしない。人間どもは俺様の奴隷。俺様は物は大事に扱うことにしている。

しかし、俺様に逆らう奴は別である。

「つてか、なんでお前まで腰を抜かしているっ！」

俺様の後ろでは、モモが尻を地べたにつけて、「あうあう」言っていた。

しかもパンツが丸見えである……

俺様は横目で、それを眺めている。

じいじいじいじいじいじいじい！

「キャッ！ な、なに見てるんですかあっ！」

慌ててドレスの前を押さえて隠しやがった。

「チッ！」

そのあと、モモは生意気にも俺様に説教しやがった。後で極刑にしよう。

で、今は俺様を1人残し、村人と話しに言っている。俺様も行こうとしたが、俺様が行くと死人が出るから待ってると抜かしやがった。後で………尻叩きの刑にしよう。

しかし、刑罰に慣れてきている感がある。あたらしい刑を考えな

いといけない。

などと考えていると、モモが戻ってきた。

「フィニス様、今日はこの村で泊めて貰う事になりました」

「うむ、そうか」

「村人達は、さっきの魔法をフィニス様がやったなんて全然思っ
てなかったです。天罰じゃとか言っ
て喜んでましたよ」

「なっ！ 天罰だと…… 仮にもこの魔王の雷を天の神の仕業だと
ぬかすのかぁ！ っと、天罰か…… うん、天罰な。よし、お前にも
後で天罰をくれてやろう。…… ククク」

「え、何か嫌な予感がするんですが……」

「なぁに、天罰だ、喜べばいい」

そして俺達は村にある一軒の宿屋で一夜を過ごす事になった。

その夜、モモの歓喜の声が村中に響き渡る事になるだろう。っふ

！…… ククク……

モモの計略（前書き）

視点を元にもどします。

モモの計略

魔王とメイドは宿屋へと向かった。

くれぐれも村人と視線を合せないで下さい。出来れば目を瞑って付いて来て下さい。でなければ泊まるところが無くなっちゃいますよ。とモモが諭すようにフィニスに訴えていた。

そう言われれば仕方が無い。フィニスも渋々従っているようだ。しかし、後で……と考えているようである。

モモが宿屋に入り店の者となにやら会話しているが、フィニスは外で待たされていた。

魔界に生を受けて5000年、これ程の扱いを受けたことがあったであろうか？ フィニスは今、怒りに身を震わせている。今宵メイドを、どの様に辱めてやろうかと思案しているのだ。

道行く村人はそんなフィニスに奇異の視線を向けているが、瞑目し怒りに震えるフィニスは気が付いていない。

しかし、とフィニスは考えた。メイドの態度がやけに大きいのだ。名を与えられたことで助長しているのか？ 名はそうとう嫌がっていたが、脅し辱め無理やりモモにした。その腹いせだろうか？ それとも上位魔人並みの力を得た所為で傲慢になってしまったのか？ いずれにせよ、主従関係をはっきりさせねば、と改めて考えていた。

宿屋側とモモの話は終わった様で、フィニスはモモに連れられて宿屋の2階にある一室に入る事が出来た。しかし街道沿いにあるとはいえ、宿場町ではなく、ただの小さな村である、宿屋といえど部屋の数はいくつか、相部屋とあいなった。

モモは貞操の危機を感じ、さっそく手を打つことにした。

フィニスはフィニスで部屋にはいるなり、モモに刑を与えようと

考えていた。しかしモモが先手を打ったのだ。

「フィニス様、その椅子にお座り下さい」

凜とした声で、宣言するように言い放つ。

フィニスはモモの堂々とした言い様に、すこし驚き素直に座る。

「お、おう、こうか？」

座るという行為に、「こうか？」などと聞くこと自体おかしい。

フィニスは動揺しているようだ。モモはしめしめとほくそ笑む。

最近モモはフィニスに対し考えを改めていた。魔界最強で自分勝手に我侭で厚顔無恥なことは今も昔も変わらない。逆らう者には容赦せず即座に殺す。だが、気が付いたのだ。それが男に対してだけだと。モモが知る限り、魔王は女性を殺した事がない。すべて辱めるという罰を与えるだけだ。ならば辱めさえ覚悟すれば何でも言えるのだと。そして、フィニスは此方が強気に出れば、素直に従う傾向がある。これはまだ理由は分かっていないのだが、おいおい分かるだろうと思っていた。そしておだてにも弱い……

「まず、言っておきたいことが御座います」

「うむ、き、聞こうか」

何処となくフィニスの表情は引き攣って見える。

「フィニス様のお力は強すぎます！」

「そ、そうか？ まあ俺様は魔界最強だからな？」

引き攣りながらも、どこかドヤ顔である。

モモはもう一息だと考え、もう少しおだてることにした。

「いえ、魔界最強は同然ですが、今や3界最強だと思いますわ」

3界とは、魔界、人間界、天界の総称である。

「ま、まあな。天界の主神だろうが負ける気はない！」

（ふっ、完全に調子に乗ってきたわね）

「ですが、強すぎるお力も時には不便なこともあります」

「不便？ 俺様の力がか？」

「はい、人間は脆弱です。フィニス様が少しでもお怒りになれば、

数百人でも一瞬で殺してしまいます。でも、それでは困るのです」

「確かに、だが人間などいくら殺しても、すぐ沸いてくるであろう。問題ないと思うが？」

「ええ、今回の様に賊だけ殺すならまだいいです？　でももし村人まで殺していたらどうなったでしょう？　村ごと破壊していたらどうなったでしょう？」

「……………どうなったというのだ？」

「雨風をしのげる宿に泊まれなかった。美味しい食事にもありつけなかった、つまりそれは、もう旅では無い！　という事ですな」

「なっ！　なぜそうなる？」

「村を破壊すれば宿も破壊されます。村人を殺せば誰が食事を用意するのですか？」

「……………そ、それは困るぞ」

（やったわ、あと少しよ）

「ですから、フィニス様の絶大なるお力は、この地では封印なさることをお勧めします」

「む…………　この俺様に人間並みになれと言うのか？」

「はい、まあそこまで落とさなくても良いですが、いざと言うときはわたくしがおります。静養中のフィニス様は何もせずのんびりお過ごしになる為にも力は必要ないかと？」

「たしかに一理有るな…………　うむわかった。では100分の1位まで落とすか？」

（キヤー。やったわ。　ふふっ、ちよいもんね）

「それともう1つ。お力と同時に魔王である記憶も封印し、ご自身を人間と思うように記憶を操作することをお勧めします」

「記憶を？　なぜだ」

「ご自身を人間だと思えば、人間に話しかけられてもお怒りになる必要はなくなります。旅を満喫する為には、お怒りは精神上邪魔なだけですわ」

「なるほど……………　うむわかった、そうしよう」

（あと少しよ、ここで喜んでダメ、わたしが旅を楽しむ為ですからね……）

「では、早速封印の儀式を」

……

そうして魔王は自身の力と記憶を封印した。

1500年の間、解けることの無い封印。

まんまとモモの作戦に嵌ったのだった。

一応、万が一の為に命の危険がある時だけ数時間、封印が解ける様にしておいたのはモモも知らないことだった。

封印が終わりモモは安心しきつてくつろいでいる。

いっぽうのフィニスは、自身が魔王であったことはすっかり忘れてる、しかし、モモが自分のメイドであり、先ほどの無礼は忘れていなかった。

「モモ、先ほどの俺に対する無礼な振る舞い、早速だが刑を与える」
これに驚いたのはモモだった。まさか今でも刑が実行されるとは露にも思っていなかった。

「ええっ、なにを仰るのですか？ わたくしはそんな恥ずかしい真似は二度としませんよ」

「逆らえば刑の執行時間が長くなるだけだぞ？ 先ずは天罰だったな……」

「ええええっ、それも覚えていてるのですか？」

「当然だ、忘れるはずがないだろう」

「てゆうか、天罰ってどんな事なんでしょう？」

「天からの罰だ。つまりこういう事だあっ！」

言下にフィニスは天井の梁にロープを結ぶと、その片方をモモの片足に結び、モモを天井から逆さ釣りにしたのだ。

ヒエエエエエエ！

逆立ちと違い手が空いているので、なんとかドレスの裾を押さえる事でショー。を隠せるのだが、それも完璧ではない。そこがまたフィニスを喜ばせた。

「チラチラと見え隠れするのが、なかなか良いものだな」
などと大喜びである。

「お許し下さいいいいいい！」

「いや、ダメだな。お前は俺に逆らった。当分このままだ！」

「そ、そんなあああああああ………」

この後、逆立ちの刑と尻叩きの刑も執行されていた。

モモは完全に誤解していた。フィニスの力を封印すれば、刑の執行など拒否出きると思っていたのだ。もしフィニスが無理やり行おうとしても、力でもって拒否するつもりだった。その為の封印だったと言っても過言ではない。しかし、実際には拒否出来なかった。

身体が素直に応じてしまうのだ。まるでパブロフの犬の様に……

「これでは、わたくしはまるで『どエム』じゃないですかあ。こんな身体にしたフィニス様を一生恨みますっ！」

「っふ……ククク…… エムか、それも良いな。名前をエムと改名するか？ ……ククク……」

モモの計略（後書き）

メイドの名を変更しようか悩んでいます。

モモがいい、エムがいい、その他。

ご意見を頂ければ参考にしたいと思います。

感想でもメールでもどちらでも受け付けますので、よろしくおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6984w/>

魔王の休日

2011年9月17日11時07分発行